

# みんなの幸せのために

高知県同和教育研究協議会事務局長 大谷 修一氏

わたしは、高ヶ池中学校に籍をおきながら高知県同和教育研究協議会の事務局に勤めています。今日は被差別部落に生まれた私自身のことについて話を進めていきます。同和教育とは、みんなの幸せを実現するためにほかならないと考えています。

幸せを実現するためには五つの要素があると思います。一つは健康であること。次に能力を向上出来ること。その次に労働が尊重されていること(働きたいという意志が認められていること)。さらに平和な社会であること。最後に差別のないことです。そしてこの差別のないことを最も大切なことだと思っています。差別とは、人をそのあるが

ままの姿で肯定しないことを意味します。最初からマイナスのままで見られる人にとっては、幸せになる他の要素も失うことを意味するので差別のないことを最も大切なことだということです。

ところで、人権意識や平等思想の進んだ現在、差別を受けたことも差別をしたこともないという声を多く聞きます。果たしてそうでしょうか。ある大手書店で実際に設けられていた採用基準の事例について話してみます。女子社員についてですが、それには容姿、身長、出身地から眼鏡の有無まで採用の基準となっていました。

また、ある化粧品会社では家族構成や視力、甚だしいの

は血液型まで基準となっていました。ずいぶんふざけた話ですが、このように人目に触れないところで差別は行われているのです。

また四年前新聞報道されたことですが、あるトンネルの開通式のとき取材のためトンネルに入ろうとした女性記者が立ち入りを拒否されました。理由は女性だけが来たものであり、立ち入ることは山の神の怒りをかうということ。こういう女性を男性より劣ったものとする俗信は現在も生きており、差別という形をとって表れています。

そのことは、九年ほど前の高知県連合婦人会が行ったアンケート結果に表れています。

それによれば、多くの人はヒノエウマ生まれの人との結婚にこだわったり、結婚を大安心の日に行ったり、葬式は友引の日を避けたりしています。

このように日本には多くの何の根拠もない俗信や慣習が行なわれており「人々は迷信や慣習に拘束され自由な意志で行動することを妨げられている。このようになわが国の社会体質こそ同和教育をその根底において存続させている要因である。(二十五年前に出された同和对策審議会答申)」と今日においてもいえます。

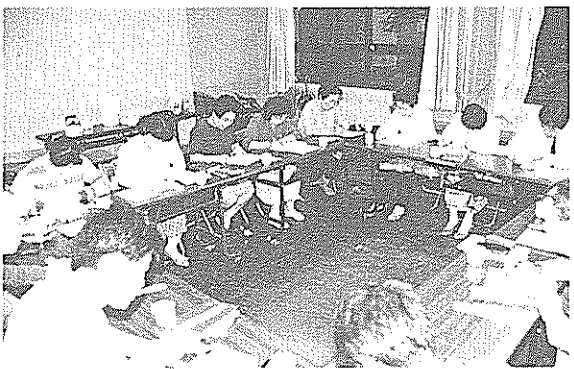
ここで、私自身の体験を少し述べてみます。高校の授業で同和教育を考える時間がありました。そこである同級生が同和教育は自分たちの問題

ではないという発言をしました。その時、私は自分が同和地区出身であり、さまざまな差別を現実的な問題として受けているものであることを訴えました。その後の私に対する皆の視線を考えると勇気がいりましたが、言わざるを得なかったのです。

たしかに、日本国憲法ではその第14条で「すべての国民は、法の下に平等であって：政治的、経済的、または社会的関係において差別されない。」とつたわれています。しかし、今述べてきたとおり現実には迷信や慣習に拘束された考えが存在し、そのことは差別することがやがていつ差別されるがわになるかも知れないということの意味します。その非合理性と非科学性を正しく認識し、訴えていかなければ差別はなくなりません。

そうした学習の場として南国市では同和教育推進講座を設けています。みんなの幸せのため、多くの市民の参加をお待ちしています。

## われら サークル仲間 創作の楽しさ 市民句会



中央公民館には五教室十七サークルがあり、文化祭への参加などいろいろな活動が行われています。年齢、職業はさまざまですが、それぞれ

サークル仲間の和が広がって、毎回楽しく受講している皆さん。その触れ合いの場を紹介します。

今回は市民句会のサークルにおじゃましました。

中央公民館で開かれている市民句会は始まって十五、六年という長い歴史を持つサークルです。練習日は毎月第一土曜日と第三火曜日の午後七時から。森武司先生を中心に、三十歳代から八十歳代までの三十五人のメンバーが賑やかに集まっています。

「先生が気さくな優しい方なので、下手な者でも恥ずかしがらずに参加できます」と言うメンバーたち。その言葉どおり創作してきた句についてお互いに楽しく和気あいあいと批評し合いながら勉強を重ねています。

生徒さんたちは俳句づくりの魅力を「今まで気が付かなかったことが見えてきて、心が豊かになっていくようでうれしいです」と笑顔で話してくれました。

## 子育ての広場

今の子どもは、有り余るほどの物質に囲まれています。「あれが欲しい」といえば買ってやることはやさしいことです。

しかし、ちょっと待ってください。ひかるちゃんはおもちゃ売場の前をだまって通り過ぎることができません。「あれ買って。あれが欲しい。」

「あれと同じの、この間買ってお家にあるでしょう。」「いやー。あれがいる。買って欲しくないやだ。」お母さんの言うことも聞かず、ついに泣きわめきただをこねます。これにはお母さんも根負けし、しかたなく買ってしまします。

幼い子どもは自己中心的で自分が持っている目にもふれるものが欲しくなります。実際、子どもが欲しいと言ったものを親はあまりにも

## 我慢する心

——甘えに負けない——

家庭教育学級専任講師 秦泉寺 千津

簡単に買い与えずるのはないでしょうか。

子どもに泣きつかれたり、「けぞ、みんな持つてるよ」の一言に弱いのです。

親にしてみれば、わが子にみじめな思いはさせたくない、仲間はずれになるとかわいそうだからと、つい欲しがらるものを買い与えることになりがちです。



大切なことは、子どもの欲求が子どもの立場から見ても、必要かどうか考えてみる事です。今、買ってやるのが適切かどうか。ねだってもだめだった」という経験や、「友だちが持っているも買ってもらうとは限らない」などの経験をさせることは大切なことです。

忍耐力にもつながります。また、お友だちとの遊びの中で、おもちゃの取り合いやつかみ合い、泣かしたり泣かされたりいろんな体験を通して、ゆずり合う心や相手を思いやる心も生まれます。

幼児期に、我慢する心を育てることはしつけの中でとても大切なことです。親が信念を持って生活してみせ、子どもがまますべてに押し通すか、我慢や待つことの大切さを教えてあげましょう。待っていて、ようやく手にしたものを、子どもは大切にしているのです。

欲しいものを我慢する心は、忍耐力にもつながります。また、お友だちとの遊びの中で、おもちゃの取り合いやつかみ合い、泣かしたり泣かされたりいろんな体験を通して、ゆずり合う心や相手を思いやる心も生まれます。ものの豊かな時代であるからこそ、幼児期からわがままを抑える我慢強さ、ものを大切にすることを育ててやること大事ではないでしょうか。